

明治期の「山岳会大会」について

水谷 秀樹

A Historical study on The Japanese Alpine Club Meeting in Meiji Era

MIZUTANI Hideki

E-mail: mizutani@edu.u-toyama.ac.jp

キーワード：明治期，山岳会大会

keywords：Meiji Era, The Japanese Alpine Club Meeting

1. はじめに

「山岳会」¹⁾(明治42年6月「日本山岳会」に名称変更，以下日本山岳会)が設立された頃の国内の登山事情は，「年ごとに盛んになりつつある登山者の数にかなり賑わって」²⁾おり，「講中登山の盛んであった富士，立山，白山，乗鞍，木曾御嶽などは白衣の登山者にまじって休暇の学生登山者もめだちはじめ」³⁾ていたと指摘されている。

このような状況の中で設立された日本山岳会は，「先ず欧州の The Alpine Journal の例に倣い，山岳専門の機関雑誌「山岳」を発刊し，山岳に関する考察記事，一切を網羅し，山岳趣味と知識の啓発に任せんと欲す，(略)」⁴⁾として機関誌の発行を試みた。

そしてその試みは，以下の様な成果を生み出すこととなる：⁵⁾

「(略)『山岳』は，会員の旺盛な登山活動に根ざした報告・紀行・評論や写真・スケッチ・地形図などを集め，内に交流と刺戟を生み，外に登山普及を促す。会員のなかには，紀行だけでなく山岳に関わる地誌や植物研究・歴史研究，登山に寄せる理念や憧憬を著書として刊行する者が相次ぎ，出版界に山岳書のジャンルが確立されていく。」

さらに，日本山岳会は機関誌の発行以外にも登山者の宿泊場所となる小屋の建設，新しい登山道の開拓，全国に向けて山岳案内記の出版，登山者同士の連絡方法の確立，「山岳会大会」の開催など様々な活動を計画した。

そこで本研究は，このような日本山岳会の活動の

なかで，「山岳会大会」に関する研究⁶⁾が見られないことから，日本山岳会機関誌『山岳』所収の「会報」に記された大会報告記事をもとに，日本山岳会が設立された頃(明治期)の大会の実際を明らかにし，この大会の開催意義について考察していきたい。

2. 第1回山岳会大会の実際

日本山岳会設立時に制定された「山岳会規則」の第4条には，大会の開催について「本会は毎年五月，十一月の両度に集会を開く(略)」⁷⁾と記されていた。

しかし，実際に「山岳会大会」が開催されたのは，日本山岳会が設立されてから3年後の明治41年5月17日であった。開催が実現するまでに3年を要した理由が，『山岳』第3年・第1号には以下の様に記されている：⁸⁾

「山岳会大会予告

本会規則第四条に，毎年五月十一月の両度に集会を開くとあれど，従来は創業の際とて，何事も不整頓がちなれば，心ならずも漸く是等の催し等を避けたりしが，今や本会の基礎も漸く固まり，百事其緒に就かんとするに至りたれば，先ず手初めに第一大会を，来る五月中に開かんとす，日取はその月第三日曜日の予定なれど，或は変更するやも知られざれば，会場，開会時刻，会費(もし徴収する様ならば)等，其他の詳細と共に会費諸君に報告すべし，尚当日は学界の名流に依頼して，山岳に関する有益且趣味ある講演を乞う筈なり」

このことから，開催が遅れた原因は設立当初の混

乱にありそうだが、ともあれ、明治41年5月17日、記念すべき第1回山岳会大会は東京地学協会会館⁹⁾(東京市日本橋区西紺屋町：当時)において開催された。

『山岳』第3年・第2号に報告された内容をもとに、第1回大会の様子を概観しておきたい。

大会は午後5時45分開会、参加者たちの様子は以下の様であった：¹⁰⁾

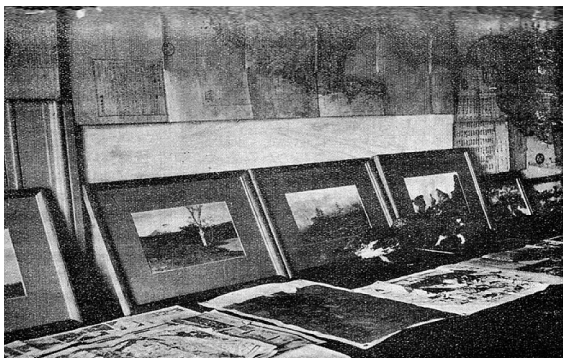
「かくて来会者は、先づ陳列室(写真-1参照、引用者。以下同じ。)に集まり、出品を巡覧せられ、或は熱心のあまり、一枚々々図書を翻して、熟視せらるるもあり、掛図を仰ぐ人、一団となりて大下氏作の水彩画に集まる人々等、右往左往の賑わいにて元来広からぬ同室内は、甚だ狭隘を感じ、午後五時過には、総員八十五名と註せらるるに至れり。(後略)」

その後大会は、「開会の辞」(高野鷹蔵)、次いで「会務報告」(高頭仁兵衛)、そして「役員改選結果報告」、「講演会」と進んでいく。

講演会では、まず、小島烏水が「ラスキンの山岳論」を、次いで志村烏嶺が「日本アルプス雑感」と題して自身の日本アルプス縦走記を2時間にわたって演説した。彼はここで、自らが縦走した地方が将来わが国登山家の探求に値する最好適地となるとの結論を述べた。

最後は、山崎直方が「欧州アルプス雑感」と題して、欧州アルプスが日本アルプスより登山設備が行き届いていることを指摘した。

第1回大会の参加者たちの主な出身地は、横浜、信州南佐久郡、千葉県、埼玉県などであった。彼らの中には、夜行列車に乗って大会に参加するなど非常に熱心な者も見られた。また、参加者を職業別に



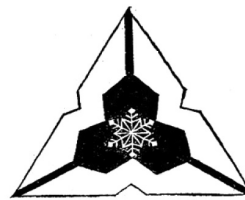
(写真-1)

見ると、科学者、新聞記者、陸地測量部員、天文台員、商人、農業家、教員、学生、美術家、著作家、銀行員、工業家、等あらゆる職業に従事している者たちであったことが「会報」から読み取ることができる。

尚、第1回大会は午後10時半に閉会、また、この頃の日本山岳会会員は500余名と報告されている。

3. 第2回山岳会大会の実際

明治42年6月1日をもって「山岳会」は「日本山岳会」と名称を変更した。それを契機として、会員からの作成希望が多く寄せられていた会員章(写真-2参照)を欧米の山岳会に倣って作成している。この意図としては、登山愛好者の増加、会の発展、さらには登山者の社会的ステイタスの向上などが期待されていたと言えよう。



(写真-2)

ちなみに日本山岳会は、この会員章の取り扱いについて、会員たちに「登山旅行の際は、成るべく、見易きところに、本章を佩用せられ(後略)」¹¹⁾と伝えている。

そして第2回大会は、明治42年5月16日に帝国教育会堂(一ツ橋)において開催された(写真-3参照)。参加者は169名(受付完了者)、そのうち会員が90名、会員以外が79名であった。

参加者を職業別に見れば、科学者、美術家、法律家、詩人、小説家、教育家、新聞記者(時事新報、やまと新聞、報知新聞、中央新聞、読売新聞)、参謀本部陸地測量部員、本誌寄稿家、商人、農業家、官吏、学生、著作家、工業家、銀行家、宣教師、水産講習所員等の面々であり、昨年同様、参加者は幅広い分野の職業従事者たちであった。



(写真-3)

第2回大会の「開会の辞」を務めた小島烏水は、

当時の国内の登山状況について、富士山を例に挙げ次のように語っている：¹²⁾

「大勢の赴く所致し方もないか知れませぬが、富士山でもさう云った風が大分近頃は見える、山の中で洋食を食べられると云ふことも結構であらう、或は自転車で曲乗り曲降りをする、又騎馬で登山を試みる、甚だしきは三味線を担いで絶頂で活惚れを踊ったと言うことが、静岡の新聞に出ておった、そう言う風に、山岳を翫弄物として居る、それだけなら何も態々山に登る必要は無い、浅草の凌雲閣の天辺に行っても宜いわけだ、こういった遊戯的登山はアチラでも一方の人々は非常に嫌っている（略）」

第2回大会が開催された明治40年代の国内登山状況は、“登山の黄金時代”と称されるほど人気が集まった時代であり、この時期に国内のめばしい山々は、次々に登頂が果たされていった。すなわち、登山の大衆化が進んで行くことになるのであるが、日本山岳会の設立にあたって中心的な役割を果たした小島にすれば、この状況はあまり歓迎できるものではなかったようである。

さらに小島は、スイスにおいてマッターホルンにトンネルを通し、列車を走らせる計画が起こったことを例に挙げながら、以下の様に続ける：¹³⁾

「日本では何ぼ富士山が俗化しても、流石にまだソコまでは落ち行かぬようである、併しモウ今も行きつつあるのである、今に山岳に窓を開ける鉄道も出来るであろう、又子供を背負って槍ヶ岳の天辺に登って、それを自慢に新聞に書くようなことがあるかも知れない、我々は山岳を対象にして、研究を進めると言うことは宜いが、翫弄的、見世物的興行的の態度に出ることは厳に避けたいと思います。又一方に於て我々自身がそういう嫌疑を招き易い位置にいるから、殊に慎重な態度を取らなければ、ならぬと思います。」

このように小島は、日本山岳会として、登山に対して周囲に誤解を与えない言動を取ることや、大会に集まった参加者たちに登山上の心得を説きつつ、さらに以下のように続ける：¹⁴⁾

「人間は今申した通り自然の一片であるから、自

然に包まれて棲息している、ところが此自然を我々人間が、正しく理解しているか、正しく自然を見ているかと言うことは、極めて慎重の態度と、冷静な判断力と、又適當の位地に立つことを要する、それにはお祭り騒ぎや、見世物興行と言うような附景気は要らない、(中略)私は山が好きである好きであるから登りますが、どうか真率な態度は失いたくない、偶ま一二の興行的態度に出る者がある為に、山岳に登ると言う、唯もうムヤミに探険とか冒険とかいって、山を這いずり回って、「山荒し」をする者と、愛山家とを、一つに世間から誤解されることは、甚だ残念である、其の誤解を取り除きたい、それには登る人は勿論、又これから登ろうとする人にも第一に山岳を知らしめ、若くは知らせる方法を探る以外はない、山のありがたい点が解れば、世間では山を他界扱いにするものも減少すると同時に、また玩弄物視する人も考え直すであろうと思う。」

以上のように小島は、登山の大衆化が進んでも、登山者は山の自然を正しく理解し、その行動が興行的とならないようにと訴える。そして山荒しと愛山家とが世間では同じであるように誤解されている状況を、山岳会大会の活動を通して解いていこうとしたと考えられる。明治期の山岳会大会の開催意義は、このような点にあったと言えよう。

小島に続き、梅澤親光が「会務報告」をおこなった。

それによると、まず、明治42年当時の会員数は638名(5月13日現在)、内外国人12名、在外国者8名であること、次に、会員数が最も多いのが、東京(175名)、次いで新潟(134名)、3位長野、4位横浜、5位大阪府であること、そして、未だ全く会員のいない県が滋賀、山形、広島、鹿児島、沖縄、樺太であること、日本山岳会の支部が新潟県、長野市、横浜市に設立されたことなどが報告された。

また、機関誌『山岳』は官庁、図書館、学会、外国の山岳会、東京地学協会、東京地質学会等に寄贈され、これによって日本山岳会の活動の様子が、国内はもとより国外にまで広く伝えられていったことがうかがえる。

第2回大会でも第1回大会同様、講演会が開催されている。演題は、法学士 柳田國男の「山民の生活」、理学士 中村新太郎の「赤石山系」、高野鷹蔵の「上高地幻燈講演」、小島烏水の「白峰山脈縦

断の旅行談」であった。

4. 第3回山岳会大会から第5回山岳会大会 の実際

第3回大会(写真-4参照)は、明治43年5月8日に出品陳列室は東京府教育会において、講演は東京市神田橋側の和強楽堂と二箇所に分けて実施された。会員からの出品は、例年通り、山岳関係の絵画、写真、雑誌、書籍、地図、標本などが寄せられている。講演会演者は、與謝野寛、子爵 田中阿歌麿、高野鷹蔵の三氏であった。また、大会参加者(山岳会会員)は93名と報告されている。

さて、これまでの報告から大会は、毎年順調に運営されてきたようであるが、以下梅澤会員の報告からは、大会運営は非常な労力を必要としていた様子をうかがい知ることができる：¹⁵⁾

「(略) 何しろ慣れて居ない、こととつづけてやったので、形容すれば足が棒の様になって、翌日足が吊って、大分閉口しました、大会を年二度なんて、空恐ろしい事、決してやるものではないと、これは毎年大会の帰りに、河田君とはなし合ふ事です。」

以上のような感想を寄せた梅澤氏はじめ会員たちの大会当日の様子であるが、会員は午前中(8時30

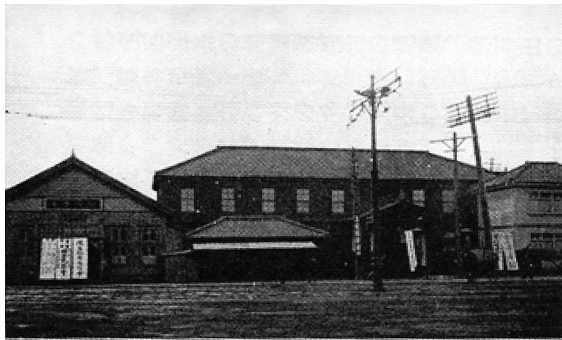
頃から)から陳列品の準備、講演会会場の設営などにとりかかり、大会が始まるのが午後6時、講演会が終了し後片付けも終えて会場を後にできたのが午後11時頃といった様子であった。当初山岳会大会を年に2回実施することが規約で制定されていたが、明治42年の規約改正では、年に1回開催することと変更されている。どうやらその背景には、このような大会運営の実態も影響していそうである。

ともあれ、このような会員の運営努力もあって第4回大会も明治44年5月7日に東京府教育会会館において開催された。この大会から、入場切符が無いと大会に参加することができなくなっている。入場切符は、事前に会員に案内状とともに三枚ずつ送付された他、『山岳』の付録としても配付された。

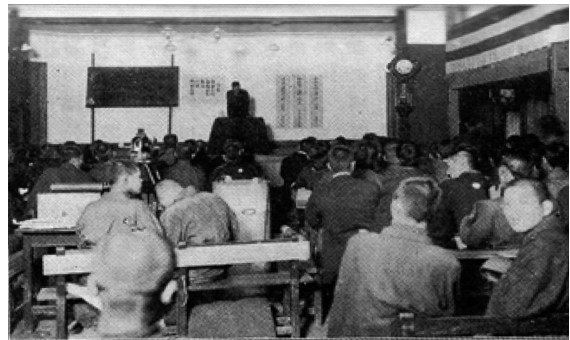
第4回大会もこれまでの大会同様、会員からの出品陳列、そして山岳に関する学術講演会が執り行われた。

参加者は、東京市在住者以外に、埼玉県、神奈川県、大阪府などからの参加であった。

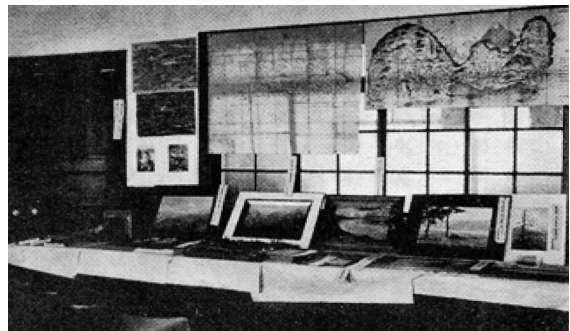
辻本幹事の会務報告によると、当時の日本山岳会は、「最近の調査で会員が六百六名(内名誉会員一人、特別会員五十六人、正会員五百四十九人)、之を府県別にすると、最も多いのが東京市で百七十三人、新潟県が百二人、神奈川県(横浜市を含めて)が三十八人、長野が二十二人、それより漸減して、



会 場



與謝野寛氏の講演(午後七時)



(写真-4)

全く会員の無い地方が七県、支部は新潟、長野、横浜にあること、職業は多方面を網羅していること、外国の雑誌交換先は阿非利加、米国、欧州各国、ニュージーランドに及べる事¹⁶⁾と組織としての規模も拡大していった。

会務報告に続いて行われた講演会は、演者として陸地測量部 柴崎芳太郎、理科大学 大橋良一、志賀重昂、三枝威之助の四氏が立っている。

最後に第5回大会についてであるが、『山岳』の中にはごく僅かな報告しか寄せられていない。

『山岳』第7年2号によると、第5回大会は「例年大会には陳列と講演とを一日に了する為め、兎角混雑を来して、折角見るべき陳列品があっても、往々十分に観覧する余裕を逸する憾みがあるというので、今年は試るみに大会を二部に分ち、陳列会と講演会とを別の日に行なうことにした。」¹⁷⁾と計画されていた。運営する会員の負担など課題はありそうだが、この大会の詳細な様子を『山岳』から読み取ることが残念ながらできなかった。

5. おわりに

本研究は、明治期において、登山が大衆化していく、その真っ只中で開催された山岳会大会の実際を、日本山岳会機関誌『山岳』所収の「会報」に記された大会報告から明らかにしつつ、この大会の開催意義について考察を試みた。その結果は以下のようにまとめられよう。

大会は、日本山岳会会員を中心にした登山愛好者から寄せられた山に関する興味深い品々を陳列展示することで、参加者たちの視覚に山の魅力を訴える内容と、登山を単に山に「登る」という行為だけで終わらせるのではなく、当時の著名な研究者たちの講演会から山には学術的な価値もあることを訴えていく内容とで構成されていた。

このような山岳会大会の開催意義は、登山が大衆化していくなかで、日本山岳会として、いくつかの研究結果から、登山者の社会的地位向上を図るなど、登山の普及・啓蒙活動を推進することにあっただけと言えよう。

【注記及び引用文献】

- 1) 設立は、明治38年10月14日。設立にあたって発起人となったのは以下の7名である。
河田黙、高頭式、高野鷹蔵、武田久吉、梅澤親光、

小島烏水、城数馬。

- 2) 安川茂雄：『われわれはなぜ山が好きか ドキュメント「日本アルプス70年史」』、小学館文庫、2000年9月、p95
- 3) 安川茂雄：同上書、p95
- 4) 高頭仁兵衛編：「山岳会設立の主旨書」、『山岳』第1年第1号所収、山岳会、明治39年4月、p3
- 5) 布川欣一編：『目で見ると日本登山史』、山と溪谷社、2005年11月、p90
- 6) 「山岳会大会」の実際と、その開催意義を考察するにあたり先行研究として取り上げた主な研究は以下の通りである。
 1. 安川茂雄著：『近代日本登山史』、あかね書房、昭和44年6月30日
機関誌『山岳』が誕生した背景や、そこに掲載された紀行文、個人の登山記録などの記述は見られるが、「山岳会大会」の開催について、あるいはその実際から開催の意義を検証した記述は見られない。
 2. 山崎安治著：『新稿 日本登山史』、白水社、1986年1月31日
主に日本山岳会が設立された経緯について記述されており、「山岳会大会」の開催について、あるいはその実際から開催意義を検証した記述は見られない。
 3. 小島烏水著：『アルピニストの手記』、平凡社、1996年12月15日
日本山岳会の設立に当たってその中心人物の一人であった小島の作品であるが、山岳会が設立される迄の経緯については述べられているが、「山岳会大会」の開催について、あるいはその実際から開催意義を検証した記述は見られない。
 - 7) 高頭仁兵衛編：前掲書、p164
 - 8) 高頭仁兵衛編：『山岳』第3年・第1号、山岳会、明治41年3月、p172
 - 9) 会場を東京地学協会会館に設けたのは、日本山岳会と東京地学協会との以下のような関係による所が大きい。
「同会の先輩諸氏にして、我山岳会に、籍を置かれ、或は表面籍を置かれざるも、本会のため陰に陽に、助力せられ、『山岳』誌上の光彩を寄興せられたる方々、少なからず」（高頭仁兵衛編：『山岳』第3年・第2号、山岳会、明治41年6月、p159）

- 10) 高頭仁兵衛編：同上書， p162
- 11) 高頭仁兵衛編：『山岳』第4年第2号，日本山岳会，明治42年6月， p255
- 12) 高頭仁兵衛編：同上書， p275
- 13) 高頭仁兵衛編：同上書， p275
- 14) 高頭仁兵衛編：同上書， p276
- 15) 高頭仁兵衛編：『山岳』第5年第2号，日本山岳会，明治43年7月， p460
- 16) 高頭仁兵衛編：『山岳』第6年第2号，日本山岳会，明治44年7月， p382
- 17) 高頭仁兵衛編：『山岳』第7年第2号，日本山岳会，明治45年7月， p366

【写真出典】

①写真-1

高頭仁兵衛編：『山岳』明治41年 第3年第2号，明治41年6月， p160より転載

②写真-2

高頭仁兵衛編：『山岳』明治42年 第4年第2号，明治42年6月， p256より転載

③写真-3

高頭仁兵衛編：『山岳』明治42年 第4年第2号，明治42年6月， p265より転載

④写真-4

高頭仁兵衛編：『山岳』明治43年 第5年第2号，明治43年7月， p457より転載

(2012年5月18日受付)

(2012年7月18日受理)